

日本の歴史 63

『100年前から見た21世紀の日本： 大正人からのメッセージ』

大倉幸宏著（新評論 2019）

本書の請求記号 210.69 0ku

稲垣宏行

安定期が現在の日本、そして約100年前（明治を含めた大正期）の日本に相当する、と言われると違和感をおぼえるかもしれません。

本書では、100年前の日本と現在の日本で多くの共通点が指摘されています。

100年前の日本の労働者も「時間つぶしをしているかのようにダラダラと働いていた」といいます。日本では職場に長時間いることこそ重要であり、「労働の質」は二の次と考えられていたからだと思います。大正デモクラシーで有名な吉野作蔵も知人から、「紙漉き工場で働く妻が工場の火災により自宅で仕事を行うことになったが、10時間かかった仕事が4時間で終わってしまい、本人も不思議がっていた」という話を聞いています。工場だけでなく、多忙な職業といわれる教員も、ただ業務に忙殺されているだけでなく、学校長より先に帰れずわざわざ居残っているという話もあります。

他にも、現在と100年前との共通点が挙げられています。

100年前は、性別や納税額などで現在よりも選挙資格が制限されていました。それでも投票に行かない有権者も少なくなかったことを本書は指摘しています。また、政治家が「小粒になった」という声が現在でも聞かれますが、100年前の日本も同じだったようです。そして、特に現代と変わらないと感じさせるのが、100年前の若者たちも社会に出るにあたり、就職活動のマニュアル本に頼っていたという指摘です。

しかし、100年の隔りがある以上、現代とはやはり異なると感じるものもあります。

女性蔑視の風潮です。現代も先進国と比べて女性の社会進出が進んでいないと言われていますが、当時は人権という言葉すら知らない庶民が多く、女性に対する心無い論調も少なくなかったようです。来年、大河ドラマの主人公になる渋沢栄一も「婦人は政治に向かない」「大臣どころではない、局長ですら恐らく満足にはつとまるまい」

と雑誌『主婦の友』で語っていました。

本書では主に日本の「短所」の部分を取り上げられています。「短所」となる原因は多々考えられますが、本書によれば日本は「村社会」であるため、ウチ（身内）の人間関係は大切にする一方、ソト（身内以外の他人）との関係を疎かにする傾向があるようです。会社に例えれば、上司や同僚など身近な人間関係は気にする一方、仕事の効率性など「ソト」のことには無頓着になるという言い方も出来ます。しかし、当時の労働状況については、労働人口に対し、田畑の数などが追いつかず、かえって効率を重視すれば労働人口を賄えなくなるという可能性も挙げられており、止むを得なかった面もあります。

政治家についても興味深い指摘があります。法政大学教授等を歴任した高木友三郎の「政治の世界に有能な人材が見当たらないのは、政治家の資質が低下したことよりも時代が変化したことによる大きな原因がある」という言葉を取り上げていることです。ただ、評者としては、政治家の失態は「自分ならばもっと上手くやれる」という思いが心のどこかにあることも原因の一つではないかと思えます。それ故に政治の苦勞を理解しないまま、いざ政治の舵を取る時に、思うように動けず失敗してしまうのではないかと。そのようにも考えられるのです。

現在は安定期を過ぎ、恐慌の時期に入ったようにも思えます。現在の我々には何を出来るのか。身近なことでは、自分たちの働き方を見直すこと、社会や政治にほんの少しでも関心を持つことが考えられます。もう少し大きな目標であれば、例えば本書でも述べられていたように、日本は「村社会」の傾向がある、女性の社会進出が進んでいないなど、日本の性質そのものを理解していくことが大事なのではないかと思えます。

いながき ひろゆき（司書・管理運営課）